

野球拳について

野球拳の成り立ち

大正13年(1924)10月、高松市の屋島グラウンドが完成し、その記念として近県実業団野球大会が催された。当時、西日本に名が轟いていた強豪の伊予鉄電(現伊予鉄道)も遠征した。対戦相手は、水原茂(元巨人軍監督)らを擁する高商・高中クラグ連合。結果は、8-0で伊予鉄電野球部の完敗だった。

その夜、高松市内の旅館で懇親会が開かれ、宴席は隠し芸の競い合いとなった。芸達者揃いの高松勢の前に、またもや伊予鉄電ナインは意気消沈。そうした仲間を奮い立たすために生まれたのが、この踊り。作者は、当時の伊予鉄電野球部の前田伍健(当時は五剣)副監督であった。川柳作家でもあった伍健が『元禄花見踊』の曲をアレンジし、即興で歌を作り、別室に部員を集めて振り付けを教えた。そして、伍健の歌と三味線に合わせ、「野球するなら こういう具合にしやしゃんせ……ランナーになったら エッサッサー アウト セーフ ヨヨイノヨイ」

全員がユニホーム姿で踊りを披露すると、大いに受け、座は盛り上がり、夜の部は伊予鉄電の大勝利となった。

昼の負けはともかく夜の勝負に勝った一行は、揚々とこの踊りを松山に持ち帰り、松山の料亭での「残念会」(あくまでも、野球の試合では負けていた)の場で披露した。以後、宴会芸の定番となる。



本家野球拳歌詞

作詞：前田伍健(1番)、富田狸通(2~4番) 作曲：前田伍健

一 野球するなら こういう具合にしやしゃんせ 投げたら こう打って 打ったら こう受けて ランナーになったら えっさっさ アウト セーフ よよいのよい じゃんけん ポン あいこで ホイ へぼのけ へぼのけ おかわりこい	三 本家野球拳 こういう具合に若返る 投げたら こう打って 打ったら こう受けて 日本国中 えっさっさ アウト セーフ よよいのよい じゃんけん ポン あいこで ホイ へぼのけ へぼのけ おかわりこい
二 踊りするなら こういう具合に野球拳 投げたら こう打って 打ったら こう受けて 釈迦もエンマも えっさっさ アウト セーフ よよいのよい じゃんけん ポン あいこで ホイ へぼのけ へぼのけ おかわりこい	四 ホニーそうじゃけん こういう具合にやり ましょや 投げたら こう打って 打ったら こう受けて 道後のブンブにえっさっさ アウト セーフ よよいのよい じゃんけん ポン あいこで ホイ へぼのけ へぼのけ おかわりこい

野球拳らしさ

審査項目にある「野球拳らしさ」とは、以下のような点です。

- 元気を与えるようなパフォーマンス、踊り、雰囲気
- 地元の伝統芸能である野球拳を踊っているという自覚
- 野球拳おどりを進化(深化)させようとする工夫 等

野球拳らしさとは、野球の所作やユニホーム等が簡単で見た目にも分かりやすいですが、それだけではありません。野球拳の発端を考えると、意気消沈したチームを鼓舞し、その場全体を盛り上げる“応援歌”として誕生したものであるといえます。

こういった経緯や歌詞等から考察すると、野球拳らしさとは上記の点が考えられ、これらの内容を総合的に判断しております(和楽器を取り入れることが望ましいです)。

また、主催者側の押しつけだけではなく、参加者がそれぞれで考え、伝統の中にも新しいもの等も取り入れて、「野球拳らしさ」を不易流行で表現していただきたいと思えます。